

同窓会報

発行者
上田千曲高等学校同窓会

印刷所
(有)アオヤギ印刷



二十世紀の足跡



同窓会副会長 柳町 照雄
(昭二十一・機卒)

同窓会員の皆様方、益々御健勝でご活躍のことと拝察申し上げます。

二〇〇〇年を迎えた平成十二年ははあと数カ月を残すのみ、やがて二十一世紀、光陰矢の如しとか、誠に感無量の心情です。

母校も大正六年創立以来、激動の昭和の歴史において幾多の変遷に巡り合い、平成九年には八十周年記念式典が盛大に催されました。本年をもって八十三年の歴史を重ねその足跡を、二十世紀に残してまいりました。その間母校を巣立った同窓生は約二万三千余名を数え、地域はもとより国内外の各界に於いて活躍をしておられると聞いており、誠にご同慶の至りに存じます。

私は、昭和二十一年本校機械科を卒業以来五十四年が経ち、同級生は全員古稀を迎えております。こんな老骨が同窓会の役員にと言われ、とんでもない事とお断りをした訳ですが、母校の昔の歴史を知っている人に是非と云う事で、やむなくお受けした次第です。当時の私共の学生時代は大東亜戦争の真つ最

中、昭和十八年に入学、毎日二時間以上の軍事教練が必修科目、食料増産のため農村への勤労奉仕、さらに終戦までの一年あまりは戦争下学徒動員令により軍需工場に配属され強制勤務、昭和二十年八月十五日終戦と同時に学校へ復帰はしたものの教室は荒れ放題、先生方は殆ど軍隊に召集されており授業になりませんでした。それから約半年後翌年三月に卒業となりましたので、学生の本分である勉学は殆どしておりません。今では考えられない学校生活を過ごしました。

そんな共有した運命が深い絆で結ばれている故か、当時の同級生の多くの友人と半世紀を超える今でも近密なお付き合いが続いている事が私にとって人生の宝物のように有難い存在です。

先般七月八日に、平成十二年度の同窓会総会が上田市内のささやにおいて開催されました。当日は午前中まで台風三号の影響で生憎の天候であったにも拘わらず大勢の会員の皆様方のご出席を頂き、盛大な総会ができました。

お集まり頂いた会員の卒業年度は昭和二十年度から六十年代にわたり、さすが伝統の重みを感じました。懇親会場では、年代の差は関係なく専門高校の特色が勤務先のあらゆる業界とのコミュニケーションや思い出話に花が咲き、和やかに終了いたしました。

二十世紀を余すところ僅か、会員の皆さま方の二十世紀は如何だったでしょうか。やがて訪れる二十一世紀に向かって上田千曲高校同窓会の更なる飛躍を目指し、同窓会員皆さまの益々のご発展とご健勝をお祈り致します。

恩師を囲んで



懇親会

心の故郷

学校長 石田 英勝

初秋の候、同窓会員の皆様におかれましては、益々御壮健にてお励みのこととお慶び申し上げます。

日頃は、久保田同窓会長様はじめ皆様には、千曲高のために物心両面にわたり、並々ならぬご協力を賜りまして、大変に心強く、生徒共々心から感謝申し上げます。

母校にお寄せくださる皆様方の御厚情に万分のでもお答えできませんよう、全校一丸となつて頑張っております。厳しい社会情勢に立ち向かえるよう、真の実力をつけ、自己確立が達成できるよう、粘り強く教育していく覚悟ですので、皆様方からも忌憚のない御意見を是非お寄せ下さい。

只今、世間では悲しい青少年犯罪が続出し、人々の心を寒からしめております。本校生には今の処、その心配は無用かと自負しておりますが、「思いやり」の心「生命の大切さの自覚」等、指導すべき点は多々ございます。皆様方にも、外からのバツクアップもよろしくお願ひ致します。さて、七月の同窓会総会には

多数の皆様方の御出席を頂き、盛會に終わりました事を感謝申し上げます。特に今年、切り絵作家、柳沢京子先生をお迎えし、芸術論、故郷論と大変感銘深いお話しを頂き、皆様方の心に響いたことと思います。同窓会員の皆様の中には、遠く故郷を離れて望郷の念にかられておられる方もいらっしゃることでしよう。

「血につながるふるさと
心につながるふるさと
言葉につながるふるさと」
と藤村は読んでおります。

故郷は、人間の心の原点です。然とするのではないでしょう。只今の騒々しい心の休まる暇のない社会の中で、故郷の温かさ、人の心の温かさを、生徒の心にも沁み込ませたいと、痛感させられた、よい同窓会だったと思っておこしております。

来年は、更に多くの皆様方の御出席をお待ちしております。そして同じ学び舎で青春を過ごした者同志、和やかに心の底から語り合おうではありませんか。

皆様方の心の故郷ともいふべき千曲高の八十余年の伝統を守り、誇りを持てる千曲高にするのが私共の責任と重く受け止めて、皆様方のご協力を頂いて、木目細かな指導をしていく所存です。どうかよろしくお願ひ致します。

します。終わりに皆さま方の御多幸と御健勝を心から御祈念致します。ご挨拶と致します。

懐古

小泉 好武

長い間お世話になりました千曲高校の思い出は、本県で戦後最初の電気科創設で、昭和三十三年一月に連絡を受け、何もなし所へ四月より新入生が入ってききましたので、種々の準備で夜もあまり眠れない日が続く状態でした。幸いにも生徒は東信、更埴、群馬県嬭恋の各地からの精鋭が集まっていたことでした。建物の建設は三年計画で新入生が卒業した翌年に完成した次第。続いて本県では農業科を工業科へ転換と新設で五校が始まった次第ですが、創設する予定の所へは科の職員を着工一年前に二名配置して準備するように申し上げその通りに実施された。当初、苦心したのは県で種々伺いたいと期待して参上したところ二人の指導主事が対応してくれ吾々は農業ですから工業のことは分からないと云つて、なるべく国の補助金を貰えるようにと「この本を参考にし

て」と産振の設備基準の本を見せられただけだった。当時、本県には電気科は古い設備の長野工業と戦時中出来た松本工業だけで参考になるような学校はなかった。関西が工業高校は充実しているので都島、京都第一、名古屋市立などの高校を見学して大いに参考になった。次に全面改築について若干触れますと、当初は現地改築の案で、新しく出来た建物はそのまま使用することで県との話し合いが進んでいた。四月に校長が変わり、元小生と一緒に数学を担当していた人で、土地の形からみて校舎と校庭を入れ替えた方が校舎の配置と校庭の使い方も遙かによくなると説明申し上げたところ同意され早速県へ交渉に行き県も納得した次第。

昭和四十八年より第一体育館、南北HR棟の順に工事は進み始めた。途中で千曲高の如き改築は費用がかかりすぎるので今後の学校はしないと県で決定になった。建造物についてはご覧の通りですで見えない部分を述べます。更埴方面へ供給する上水道の直径70センチ位の鋼管が校門の右側を通り南HR棟前を平行して通過し道路に抜けて居り校舎の基礎工事には電探で探して実施。新潟より東京へ送る天然ガスのパイプが北側の道路下を通過。更に校舎とグラウンドの間の道路下には東京直江津、ウラジオストク、モスクワへの電々の国際回線があり、校庭への地下ケーブルの給電工事、堀の工事等では電々公社で大変神経を使った。紙面の都合で簡素に述べました次第です。改築最後の電子機械科棟竣工の三月、私は学校に別れをつげた。

進路状況について

進路指導係

情報化時代を敏感に感じ取っているということでしょうか。マスコミで報じられている状況は、ほぼリアルタイムで本校にも伝わってきます。進路を巡る状況も例外ではありません。ほんの数年前まで半数を超えていた就職者数は去年三分の一まで減少し、ついに進学高校のような状況を呈しています。同じく、数年前まで遠い世界の出来事だったフリーターの出現も驚きました。いわく、自分の希望する職種がない、時間を縛られたくない、やりたい事が分からない等々。

しかし、堅実な職業人を育成する千曲高校が変質したわけではありません。味曾有の求人難にもかかわらず、地域産業の担い手として本校に寄せる期待は

極めて高く、製造業を中心に引く手あまたの状況が続いています。したがって、就職への強い意志があり、無理な要望をしない限り希望者は全員就職出来るでしょう。これも一重に先輩諸氏のご活躍の賜物と存じます。

いっぽう、進学者数は指定校の増加と入試の易化を反映してか急激に増えています。より高度な技術の習得と資格の獲得がその狙いでしょうか、今後ますます増えるものと思います。

また、第一期生を送り出した「生活福祉」「食物栄養」の大半が進学を希望していますが、順当な選択かも知れません。これからの数年がその将来に大きく関係すると思います。

何れにしろ、進路にかかわって強く感じることは、同窓生の影響が極めて強いということです。自分は伝統と実績を有する千曲高校の一員であり、自分の行動が後輩に大きく影響を及ぼすということを考え、母校の伝統がさらに輝くようを意識させたいと思います。どうか、今後ともご指導ご協力をお願い申し上げます。進路のご報告と致します。



四年目のカンボジア支援

中澤 東樹

九七年、「カンボジアの子供たちに絵本を送ろう」と始めたカンボジアへの支援は、確実に大きな広がりを見せながら、四年目を迎えようとしています。

そもそも、この運動のきっかけとなったのは、当時の生徒会顧問の相原先生と、内田弘慈氏との出会いでした。内田さんは、東大寺の僧侶である傍ら、長年カンボジアで井戸掘りをされています。内田さんと直接お会いして、感動した相原先生のはたらきかけが、この支援のきっかけとなったのです。

九七年の千曲祭では、絵本、文房具、衣類とバザーの売上金と募金を内田さんに届け、マカラー高校に「ポンプ式井戸」を造ることができました。

支援活動が続ける中で、この活動は生徒の中にも定着してきます。翌年、内田さんを招いて行われた座談会で、カンボジアの実状を知らされた生徒会役員が、「カンボジアを見聞したい。」と希望し、内田さんのカンボジア行きに同行させてもらうことになったのです。彼ら三人は、マカラー高校を訪れ、交

流しました。

この年、九八年の千曲祭は、カンボジア支援が文化祭の一つの柱となるまでになりました。その中から生まれた成果として、全校が関わる企画として、全校が一体感を共有することができ、また奉仕活動の意義を改めて喚起することにもなりました。

具体的に行われた取り組みは、内田さん所有の写真の展示。カンボジアの状況説明。ビデオ放映。地雷、井戸の模型製作、展示、支援バザー等でした。これらの取り組みは、信濃毎日新聞、東信ジャーナル、週刊上田や、上田ケーブルテレビでも取り上げられ、市民の関心を集めることにもつながりました。

この年集められた支援物資と募金(十八万円)は、十二月に内田さんを通じてカンボジアに届けられました。

昨年九九年の千曲祭は、四〇回の節目の文化祭でもあり、カンボジア支援がメインテーマとなりました。夏には三名の職員がカンボジアを訪れ、地雷被害の実態を目にしました。また、先輩のこれまでの活動に感銘を受けていた執行部の生徒たちは、より大きな支援と成果を出したいと文化祭に望みました。

カンボジアのコーナーを第二体育館に移し、カンボジアの紹介、職員のカンボジア視察の報

告会の他、カンボジアの雑貨販売を実施。本物の地雷も展示するなど、充実したコーナーとなりました。文化祭期間中も衣類や文具の提供を受けつけるなど、支援にも力を入れました。バザーの売上金の十四万五千円は、募金の八万円あまりと共にカンボジアへ送られました。

さて、四年目を迎えた今年の千曲祭では、昨年までの支援の継続と、更なる支援の拡大を目指しています。夏休みを利用して、カンボジア担当の生活福祉科三年の加藤澄子さんが、職員と共にカンボジアを訪ね、地元高校生との交流、カンボジアの実状の視察をすることになっています。

支援活動は、ともすれば年を経るうちに情性となり、関心も薄れていくおそれがあります。しかし、今年の執行部は昨年を上回る活動を目指して、全校生徒に働きかけています。また、地域の方々にもこの活動に関心を示していただけるよう、宣伝活動にも力を注いでいます。

四年目を迎え、正念場でもある今年、生徒の活動と、全校生徒の盛り上げで、実りある文化祭の実りある運動となることを期待しています。



第四一回 千曲祭
九月一日(金)～三日(日)

一 千曲祭の目的

日頃の学習、及び生徒会・クラブ活動の成果を発表し、校内の連帯と交流を深めると共に、地域の人々に千曲高校を理解してもらい、好意と支持が得られるようにする。

二 メインテーマ

(コンセプト)と方針
「韻」響け千曲

千曲高校の生徒一人一人が、「夢、希望、友情、愛情、勇氣・・・」全部を響かせたい。

●コンセプト

カンボジア支援、交流の継続と、ウッドカーリングを中心に、記念すべき二〇〇〇年、又、二〇世紀最後の千曲祭を大いに盛り上げ、カンボジアの人達だけでなく、地域の人々との交流も深める。

●方針

カンボジア支援は4年目を迎えました。今回もこの活動を引き続き行います。さらに今年は、ウッドカーリングを通して、地域の人々との交流を深めることを目標としています。

クラブ活動成績

〔運動部〕

《東信大会》

●男子バスケットボール

一回戦 上田染谷丘51―43上田千曲

●弓道

団体 予選敗退
個人 平岡明夫13位
平田竜也18位
(国体予選出場権を得る)

●空手道

個人予選敗退

●サッカー

一回戦 上田東5―0上田千曲

●女子ソフトボール

準決勝 上田染谷丘15―0上田千曲

●女子バレーボール

三位決定戦 小諸19―3上田千曲
(東信4位)

●剣道

団体予選リーグ 2勝3敗東信5位
個人3回戦進出

●卓球男子

団体準決勝 上田3―2上田千曲

三位決定戦

望月3―1上田千曲
(東信4位)

個人シングルス堀内(ベスト8)
ダブルス清水、堀内(ベスト4)

●卓球女子

団体一回戦 望月3―2上田千曲

●柔道

団体 臼田3―2上田千曲
佐久長聖5―0上田千曲

個人66kg級 平林祐二一回戦進出
高橋佑輔一回戦敗退

81kg級若林直樹二回戦進出

●ハンドボール

予選トーナメント 上田千曲18―12野沢南

決勝リーグ 小諸31―12上田千曲
上田22―14上田千曲

野沢北30―10上田千曲
(東信4位)

●男子バレーボール

上田千曲2―0臼田
丸子実業2―0上田千曲

●女子バレーボール

一回戦上田千曲2―0小諸
二回戦岩村田2―0上田千曲
(東信7位)

●女子バスケットボール

一回戦野沢南73―13上田千曲

●男子ソフトテニス

団体ベスト8
個人高橋、一ノ瀬組第2位
林、高桑組ベスト16
滝沢、竹内組ベスト16

個人高橋、一ノ瀬組第2位
林、高桑組ベスト16
滝沢、竹内組ベスト16

●女子ソフトテニス

一回戦 上田千曲3―0佐久長聖
二回戦上田西3―0上田千曲

個人青木、高橋組ベスト16

●陸上

佐藤光雄砲丸投げ7位
金澤純一砲丸投げ8位
有井真吾走高跳び5位
関光憲走高跳び7位
依田里美砲丸投げ2位
以上県大会へ

《県大会》

女子ソフトボール 一回戦飯田女子26―0上田千曲

●剣道

予選リーグ敗退

●柔道

個人81kg級 若林直樹一回戦敗退

●ハンドボール

二回戦上田千曲25―12富士見
準々決勝屋代28―6上田千曲
(ベスト8)

●男子バレーボール

一回戦岡谷工2―0上田千曲

●女子バレーボール 一回戦長野商2―0上田千曲

●卓球男子

団体一回戦 東海三3―2上田千曲
個人シングルス 堀内一回戦敗退、
清水、堀内一回戦敗退

●山岳

参加14校中12位

●女子ソフトテニス

一回戦上田千曲2―1木曾
二回戦上田千曲2―1文大附
三回戦 飯田風越2―1上田千曲
(ベスト8)

●男子ソフトテニス

個人一回戦 阿智高校4―2青木、高橋組

●男子ソフトテニス

団体一回戦 長野工専2―1上田千曲
個人高藤、一之瀬組ベスト8
滝沢、竹内組ベスト16
(以上2組北信越大会へ)

●陸上

依田里美砲丸投げ6位
北信越大会へ

《北信越大会》

男子ソフトテニス

一回戦 滝沢、竹内組4―3福井敦賀
二回戦 石川能都北辰4―0
福井高志4―0 高藤、一之瀬組

一回戦 滝沢、竹内組4―3福井敦賀
二回戦 石川能都北辰4―0
福井高志4―0 高藤、一之瀬組

一回戦 滝沢、竹内組4―3福井敦賀
二回戦 石川能都北辰4―0
福井高志4―0 高藤、一之瀬組

一回戦 滝沢、竹内組4―3福井敦賀
二回戦 石川能都北辰4―0
福井高志4―0 高藤、一之瀬組

〔文化部〕

《野球夏の大会》 阿智高校9―0上田千曲

《定時制》 池田一成・高橋美沙・高橋亜弥

《定通東信大会》 バスケケットボール 決勝上田47―25上田千曲

●卓球 団体決勝 野沢南3―2上田千曲

●バトミントン 団体上田千曲3位

《定通軟式野球東信大会》 上田10―8上田千曲3位

バレエ部 桐花会

事務局 石沢 清枝

同窓会員の皆様こんにちは。
バレエ部桐花会の発足から今年で20年になります。これまでの過程を紹介したいと思ひます。

昭和56年7月に34年卒業のバレエ仲間が集まるいつもの楽しい会に、「丸山先生をお呼びしましょう。」とお誘いの電話をお掛けしました。その丸山先生が「バレエ部のOB会を作ったらどうだろうか。」と運動部卒業名簿を渡されました。それからやって見ようという事になり、8月18日に初めての会を開くことに決めて、名簿からバレエ部員の名前を拾い出し同窓会名簿を照らし合わせて住所と電話番号を調べ、毎日毎日電話の日が続きました。

初めての千曲高校バレエ部のOB会が勤労体育センターで行われ45名の皆様に出席して頂き、その場で役員を決め会の名前は丸山先生の発案で「桐花会」として発足しました。紅白試合を楽しみ、懐かしい人達にお話し話も弾み、また若い人達も沢山出席して下さってとてもうれしい日でした。記念写真も写真屋さんに撮ってもらい、今見ると皆な若く写って張り切った顔が並んでいます。初めての役員は相談役丸山登一郎先生・顧問成沢秀敏・会長高井忠史・副会長山浦幸知子・伊藤一郎・会計一名・監事二名・委員十名・事務局一名となりました。

その後第一回の総会に向けて数回役員会を重ね、皆さん苦勞して名簿も作り上げました。

57年5月14日第一回桐花会総会が開かれ男女混合試合を行い親睦会には新しい顔ぶれが見られ又、丸山先生・宮本先生・清水先生・小山先生・掛川先生も御出席され感激の一日でした。

第3回には東京支部のバレエ部の方8名をお迎えしてその頃の学校の様子、コートを苦勞して作った事、ポプラの木を遠くから自転車運んで植えた事など話をして頂きました。その後総会にも東京支部から数多くの人達が参加して下さいました。

第四回から若い男女のバレエのクラブチームが出来、それぞれに補助金を出し応援して来ました。その方達も総会に出席して楽しい会になりました。63年には母校のバレエボール大会の健闘を祈ると新聞広告に出しました。第8回は会長小林義輝・副会長に中川清が加わりボーリング大会を行いました。人気が高かったのですと続けました。

今年第19回で会長を中川清副会長に宮沢令行も加わり、母校の男女バレエ部に試合ボール4個を持って激励に行きました。皆さん頑張ってください。

今年の計画はソフトバレエボール大会を予定しています。10月14日(土)市民体育館で1時30分から行い、バレエ部の人達だけでなく卒業生は誰でも参加できます。楽しく汗を流しに来て下さい。

バレエ部卒業の皆様お誘い合わせて桐花会に出席し、年齢に違いがあっても一つのボールに熱い青春の血を燃やした仲間として、語り合いたいと思います。お待ち致しております。

ロボットコンテストに出場して

電子機械科三年 花岡 省吾

機械班は、毎年、ロボットコンテストに出場してはいますが、去年は三年生がいなかったの、二年だった僕達が初めて全部自分でロボット製作を進めていきました。

6月ごろに競技内容が送られてきて、まず最初にどんな機構のロボットにするかという案を練りました。競技内容は床に転がっているゴルフボールとテニスボールを60センチの高さのゴール台の上に乗せる事と、床に

ねかせて並べてあるバトンと90センチの高さの台の上に乗せることで得点を得られるというものでした。ボールの方はなんとかなるんじゃないかと思いましたが、バトンに乗せる方はかなり難しいんじゃないかという気がしました。班員で案を出し合ったり、顧問の先生の意見を聞いたりましたが案だけでは本当にできるかどうか分からな

いので、少しずつ作って行って、その中でいろいろ試して行ってみようという事になりました。ロボットでは、ロボットのサイズが規定として決まっているので最初にそのサイズに丁度収まる位の骨格を作ってみました。実際に作ってみると思っていたより小さく、本当にこの大きさの中に全て収まるのだろうか

かと不安になりました。主な機構を作り始めたのは夏休みの少し前ごろからでした。バトンに乗せるのはやはり難しいという事で、まずはボールをすくって台の上にあげる機構を作っていく事にしました。夏休み中に何日か集まってやったことで9月にはだいたいの形ができて上がっていました。

大会があるのは10月の最初のころだったので、それからの細かい調整や、コントローラーでロボットを操作できるようにする事などが一番大変でした。班員5人でそれぞれ自分の得意な

作業を分担して作っていきました。大会が近くなってきたころにはほとんど毎日位いつもよりも少し遅くまでのこって製作していきました。バトンを台の上に乗せる機構はかなり苦勞しましたが、大会の前日は、遅くまでのこってロボットの調整と操作の練習をしました。

去年の大会は、初めてテレビで放送された事もあって操縦していても緊張しました。着実にボールで得点を稼いでいったのがよかったのか、決勝まで勝ち残る事が出来ました。決勝では、バトンに乗せる事に挑戦しましたが、失敗してしまい敗れました。しかし、準優勝という満足のいく結果が残せました。

今年も班員で協力しあって千曲高校の機械班にしか作れないような個性的なロボットを作りたいです。



今年度同窓会に出席...

激動の時代に生きた
わが青春の日に思いをはせて

昭二六建築卒 武井勉

七月八日の同窓会に、同級生の久保田高冬同窓会長を支援しようと友人らと参加した。柳沢京子先生の講演「郷土の自然の美しさを大切に護ってほしい」とのお話に感銘を受けた。総会後の懇親会も例年以上の盛り上がりだそうで、母校を愛する熱気が会場にあふれていた。残念ながら女性参加者が少なかったが、会場の雰囲気や和らげ華をそえてくれており、「次回は女性であふれるようにしたい」と異口同音の声々であった。宴たけなわとなるにつれ、母校の思い出、わが青春の日々がよみがえってきた、それが、たまたまなく懐かし、編集者の求めに応じ記事を書くことにした。昭和十九年、敗戦色濃くなっても、国民は勝利をあくまでも信じていたある日、小学校六年の担任に少年航空隊志願を申出た。「お前のような病弱でやせぎすは軍人なんてとんでもない、上田商工学校へ行って技術者になり銃後（日本本土）を護れ」と叱られ、

ある。千曲の前身商工学校時代。二年生以上は学徒動員で工場生活、一年生は校庭を耕して南瓜や薩摩芋づくり。湯川校長の指揮で、「米軍が上陸したら、長い足をこう払うのだ」と連日棒振りの稽古。楽しみは、朝礼の際のラッパ部のさわやかな音色。次に全生徒上半身裸になつての乾布摩擦。「オイチニ」の気合も先輩から伝わった「オチャライ、オチャライ」。当時の母校は材木町、隣の女学校（染谷高校の前身）生が通る。横目で見ながら、懸命に声を張上げた。この時ばかりは、たくましい少年としての優越感にひたつていた。やがて終戦。先輩達が工場や軍隊から帰ってきた。その恐かったこと。詳細は割愛するが、毎日、友人の誰かしかが、先輩全員が一行となつてくれる、いわゆる総ピントをくらつていた。その恐い先輩達も応援練習の際には指導性を発揮、格好良かった。下級生の回りを囲み、気合をいれる。いつしか自分達がそうした側に立っていた。やがて母校は、上田市立高校、上田千曲高校と変身していった。応援も上手。テニスや卓球は県下でも勇名をかせいだ。野球だけは弱く、いつもごろ負け、それでも飽きもせず、遠隔地まで応援に行き、全校応援団も激励歌だけは上手になつていった。ある敗戦の時、応援団長が、

思わず「敗戦歌！」と悲痛な声を上げた。激励だ！と久保先生にこつぴどく叱られた。時はめぐり、野球部の市内大会で優勝のチャンスがめぐってきた。一点差の九回裏、ニアウト満塁。正に一打逆転。セリター前、クリーンヒット、大逆転。だれの目にもそう映った。しかし、結果は、セリターからの鋭い好返球で二塁封殺。即ちセリターゴロ。悔し涙にくれた。演劇の大家押金先生の影響で、演劇部はもちろん全校の演劇活動が盛んで、すばらしかった。個人的なことで恐縮だが、文学班の発行誌「さざなみ」を人に貸して紛失された。永久保存と朱書して母校に残して置いたのも今はないという。綿貫先生からお借りして、一三三四五八号は手元にある。なんとしても、六七号を探し出したのが、私の切なる願いである。大勢の希望者がいれば複製も考えたい。私達、が母校に在籍していたのは、旧学校制度の時から六年間。したがって書きたいことはまだまだ山ほど、ここに記したのはほんの一部に過ぎない。私達は建築科だけでも、毎月恩師小泉先生との会を設けているが、学年全体でも「二樹会」と銘うって、近隣の者が集まりマレットゴルフをやったり、全国に呼びかけては全体会を開催、旧交を温めている。今年十月二十二

日に女神湖畔のホテルで開催する。先日十数人で下見をし、盛会を楽しみにしている。

講演(要旨)

「もしもふるさとを大切にしませんか」

切り絵作家 柳沢 京子先生

柳沢さんは、浅科村で生まれました。近くには千曲川が流れておりそのような環境で育った。

現在はオリジナリティの高い「切り絵」を創作の柱として、美しい風土への提言などにも積極的に取り組んでいる切り絵アーティストである。

ドイツへ行かれることも多いようであるが、ドイツのイン川との違いの中では、ドイツの川はゆったり蛇行して流れている。自然の植生の中で何が一番本来のものなのかを長い時間かけて見つけていく様子を話された。

日本の長野市から白馬へ向かうオリンピック道路を行くと、古い茅葺き屋根が青いトタンに変わっていくのは悲しい事だと言われた。せつかくの茅葺き屋根が青い色に変わった事により、自然と不釣り合いになり強い青が黒く見えてしまします。昔のように茅葺きの色は映えて

いると思う。その場所に立つて手でその青い色を隠して見たらどのように見えるか、やって見て下さいとの事でした。

小布施町では女性が毎年10人位づつ海外視察に行っているそうである。海外では旅人に庭の開放をしていて、自由に庭に入つて見学できる所があるそうです。女性がこういう事を見て小布施町に女性の感性を景観の中へ生かしてきた事によって現在の小布施町の発展してきた背景があるのではないのでしょうか。

スイスでは、丘に家を建てるときに一年間家の位置に棒を立てて何も人に文句を言われなければ、その場所に家を建てて良い事だそうです。美しさをきちんと守る事により、世界中から観光客が訪れるのではないのでしょうか。長野県でもサンセットを目玉としたらどうでしょうか。青木村の保福寺峠から見た上高地は美しく、外国人によつて認められた。このような自然豊かな長野県で、ふるさとを大事にしていく事が大切なのではないのでしょうか。

このように多方面にわたり話をして頂きましたが、きりえの世界で活躍されている方の感性の素晴らしさを教えられた講演でした。



民話を再話するなかで 発見したこと

滝沢 喜和子

梅雨のさなかのある日、一枚のがきが届いた。下さった方は高校の時の同好会の顧問のおひとりであった上野郁夫先生であった。

私は数年前から童話を書くことを一時休止し、もっぱら民話にかかわりを持つ機会に恵まれた。そしてこの一年は、七万二千部を発行する地域新聞「週刊上田」の一面に、「滝沢さわこのふるさと民話散歩」を執筆している。内容は、一部と二部に分かれ、一部では民話にまつわるエッセーを、二部はおはなし、で民話を再話している。それが五十回目で、満一年になった。折しも、先生からの便りには五十号のお祝いと、励ましの言葉の中に民話を語る私の根源となっている想いを先生は見のがさずにおぼえていて下さったことがシンから嬉しかった。

受けて現在の私があるのである。

急に話のトーンが変わって恐縮だが、そもそも民話とは「民間話」の略で、伝説や昔話、あるいは世間話といったものまでも含んでいる。伝説は石や松といった特定のものにくっつく、例えば田村將軍の兜を置いた、鎧石であるとか、鎧松だとか言われるものである。昔話は、桃太郎やかちかち山、良いジジヤ悪いジジ、といったものであり、世間話は、キツネやタヌキに化かされたという類のものである。

作家の松谷みよ子さんや佐久市在中の民話作家の大日方寛先生は現代民話もおやりになっている。今現在も民話になりうるということである。その中で戦争中の話などは最たるものである。以上が、ほんとおおざっぱな民話の定義であるけれども、民話は語られるたびに、骨の部分は変わらないが、その他の部分は常に変わるという運命をもっている。語る人の人生がそこに加わったりするからだ。

話のつじつまの合わない部分を不思議に感じたり、なぜ？と

うして、と、常に疑問を持ち、祖先は何を言わんとしていたのか、再話者はじっくり聴き取ることが大事だと実感している。

さて、松谷みよ子さんの「竜の子太郎」は千曲高校の近くの小泉や塩田平に伝わっている「小泉小太郎」の話と松本平に伝わる「泉小太郎」の話が一つになって生まれた物語である。

小泉の小太郎は赤ん坊の時、産川に流され、小泉の婆が拾い育てたが、食っちゃ寝の毎日、やった事といえば、小泉山じゅうの萩の木を根こぎにしたことぐらいであるが、泉小太郎は母竜の背に乗り、湖の土手を切り、松本平を造ったという大きな業績を残した。

地元という身内びいきも手伝って、小泉小太郎は食っちゃ寝の毎日で小泉山じゅうの萩にしても、それだけが仕事ではなかっただろうと、小太郎の出生と業績を推理してみた。

小太郎は僧と大蛇との間に生まれた子だそう。毎夜寺に通う娘の着物の裾に針に糸を通して、その糸をたぐりよせるうち娘の正体を知った僧は逃げるが、大蛇もまた、針の黒がねの毒に弱り赤ん坊を産み落としたり後、死んでしまう。大雨が降って大水といっしょに流された赤ん坊は産川を下り小泉の婆に拾われ

た。

祖すじだがここまでが一つの話で産川の由来といった形で小太郎の出生が語られている。その続きは前記の食っちゃ寝の小太郎であるが、上田の小泉小太郎の話はこの二つの話の一つになって語られている。

人間と蛇との婚姻話は各地にあるが、結局のところ、小太郎は両親に見捨てられた子である。

十四歳になって初めてした仕事は萩の根こぎで、たった二束だが、結び目をほどくと家中はぜくりかえるほどの大量であるから、小太郎は力持ちなのだ。が、なぜ薪にするなら里山に多い小ナラやクヌギじゃないの？という疑問がわく、萩の花をよく見れば、古代米に色も形も似ている。奈良県明日香村で古代米を手にしたことがあるのでよくおぼえている。

古代、稲作文化や養蚕、機織りの文化は渡来人が持ってきた技術だそう。それも古代韓国人の人々が、である。

小泉の地に落ち着いただろう。古代韓国語で赤ん坊のことをアガという、私の母などは赤ん坊のことをアガ、といっていた。古代の韓国語が日本語になるかわるととき濁音が清音になるという法則をもっているし、玉は「タム」といってアガと同義語で王様を意味する。小太郎は王様に匹敵する身分であっただろう。古代から身分の高い人は子を乳母にゆだねた。小泉の婆がそれに当ってはまる気がする。小太郎は稲作り、それに必要な水利の便にも貢献したのではないだろうか。なぜならば、小太郎の母は蛇（ミ）で育った場所も小泉、と水に大いに関係があるからである。と、推理する。

推理の裏づけにもう一つ、小泉山の中腹に、大日堂があるが、そこには「小蜘蛛」の話が伝わっている。「蜘蛛」は、古代韓国人を指す呼称の一つであったと『もろひとつ万葉集』の著者の李寧熙さんはいっている。

いかにも日本的な話のふりをしている、古代韓国人の稲作に尽力した人物のアカから少年期を伝えていないのではないか、十四歳にして初仕事をする小太郎だが、のみならず少年が飛躍する年齢でもあるのが興味深いことだ。

民話は耳をかたむければさまざまなることを教えてくれるのだ。

日々鍛練！

佐々木 茂雄

(昭和60機卒)

同窓会会員の皆様におかれましては、益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。私は昭和60年3月に本校機械科を卒業いたしました。在学中は陸上競技班でハンマー投げをしておりまして、全国大会まで行かせていただきました。その折には同窓会からは多大なるご支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。高校3年間全力で取り組みました結果、高校総体(インターハイ)は6位に入賞することができましたが、準備万端で臨んだ秋の国体では見事に惨敗してしまい大変に悔しい思いをしました。今思えば高校時代の競技成績は、学校の勉強を一つもしないで練習ばかりやっていた割には良い成績だったとはいえないませんでした。しかし、それとは別に得たものもありました。試合の結果が良かった時の人々の温かさ、それとは反対にダメだったときの世間の冷たさ、自分の記事が新聞等に載ってわかったメディアの力のものすごさ、そして努力したのに芽が出ることなく去っていった競技仲間の無念…、これら

何回も目のあたりにして、陸上競技は私に多くのものを教えてくれました。このとき学んだことが今でも自分の中で思考や行動の原点となっています。当初、大学に進学してまで陸上競技を続けることは考えていませんでしたが、国体の惨敗があまりにも悔しかったので、国体で負けた相手に何としても勝ちたい！、と強く思い一番熱心に誘っていたいただいた東海大学に進学しました。当時の東海大学陸上競技部投擲ブロッカーは、学生日本一の座に君臨する集団でした。ある程度覚悟はしていました。この大学の練習量や質はケタはずれていました。相撲の世界と同じく競争の世界ですから仲間を蹴落とさないと自分以上に上がれません。脱落していく者が圧倒的に多かったなかで必死に戦った4年間でした。2年も、良い事もありました。2年には学生選手権(インターカレッジ)に優勝、代々木の国立競技場の一番高い表彰台に立ちました。3年時には、今度は学生ランキングで一位となり、また陸上競技部の主将も任せていただき、人の上に立つことの難しさも経験しました。現在は上田原で行政書士事務所をやっております、行政書士の業務は幅広いのですが私の事務所には、建設業者の方が相談や依頼に来られるのが多いです。そのほか

は土地や農地の開発、相続の手續、会社設立、在日外国人の帰化・永住申請などは近年取り扱件数も多いです。たまには離婚の相談などもあります。弁護士事務所より敷居が低いので気軽に困り事の相談に来られる方が多いです。そのぶん同じ内容の依頼は2つと無いので毎日の勉強です。最近では中高校時代の同級生がよく顔を出してくれま。そして「勉強しないで運動ばかりしていたお前がなんでこんな仕事をしているんだ？」みたいなことをいいます。でも競技スポーツも商売も同じではないかと思えます。競技はケンカですから、相手を先に読み、そして相手の一番やっつけてほしいことを、一番やっつけてほしいことを、一番やっつけてほしい時にするのがケンカであり、これにルールがあると競技です。それに対して、相手の一番やっつけてほしいことを、一番やっつけてほしい時にするのが商売だと思えます。大切なのは、いかに人の心を理解できるかです、これに尽きます。もう7年目になります。頼まれて高校の陸上部を指導しています。仕事の合間に見に行ったりしてなかなか大変なのですが、お世話になった陸上競技への恩返しだと思っています。今は週に2日ぐらいしか見にいきませんが、それでも昨年はインターハイに初めて選手を送り出しました。

一人でも多くの生徒に出場してほしいと思い、今後も出来る限り続けたいと思っている今日この頃です。

開催のお知らせ

同期会(昭和30年〜33年同窓)

還暦を迎え、二十世紀を振り返りつつ、新たな時代を迎えるに当たり、第三回の同期会を開催いたします。

期日/二〇〇〇年

十月二十二日(二泊)

場所/戸倉上山田温泉

「ホテル清風園」

会費/一万五千元

問合せ参加申込先(締切九末日)

事務局/建宮澤令行

TEL/0268(38)3266

切絵作家 柳沢京子先生 講演の写真



編集後記

昨年同窓会協力金をお願いを、会員の皆様に致しましたところ、多くの方に協力して頂き、ありがとうございました。この会報14号は、協力をして下さった方に発行する事になりました。

千曲高校の歴史も八十余年となり、同窓会員の皆様の年代層も広がっております。したがってこの会報内容も、母校の生徒会・クラブ活動の様子と共に、「活躍する同窓生たち」という企画を設けて高校卒業後も各界で活躍する同窓生の皆様から、原稿を頂き会報を作ってみました。

原稿をお願いする中では、来週から仕事でヨーロッパへ出発するので難しいという方や、大会が近くて半分原稿を書いたが忙しくて次回に載せてほしいと言った方もあり、各界で同窓生の方々が活躍されている事を感じました。このような事を会報にシリーズ化して載せていきたいと考えております。

又、同期会・OB会他多くの方々にお忙しい中原稿をお寄せ頂き、ありがとうございました。また、会報が多くの同窓会員の皆様の参加できる形を目指していきたいと考えております。これからご協力お願い致します。(事務局)